

新型コロナウイルスの影響により、一気にテレワークが普及しはじめた。日本では一九八〇年代から登場していたにもかかわらず浸透しなかったが、ある調査では今年三月に一三%であったテレワーク就業比率が四月には二八%に倍増している。これが一時の変化か長期の方向転換なのかは不明であるが、外国の動向と比較すれば方向転換の可能性大である。

そこで登場してきたのが、これまで主流の終身雇用と年功序列を前提としたメンバーシップ形式から職務や達成目標を明確にしたジョブ形式への就業形態の変化である。前者の仕事の評価は二〇世紀初頭にF・テイラーが著書『科学的管理法』で明確にしたように、成果を時間で割算した数値で、効率と名付けられる概念である。

これは明確な定義のようであるが、意外に時間の概念が簡単ではない。テイラーが著書で、当時のゴルフクラブの新参キャディは先輩からボールの行方を正確に見届けよう指導されるという事例を紹介している。ボールの発見に時間がかかれば、時間あたりで賃金が支払われていた当時は収入が増加したからである。

この問題を解決するためにはジョブ形式での仕事について、分母になる時間の概念を再考する必要がある。筆者は六年間ほど世界各地の先住民族を訪問してテレビジョン番組を制作していたことがあるが、先住民族の時間感覚は現代社会と相違するということを何度も経験した。それらはテレワークの時間概念の参考になる。

カナダの北極圏内で生活するイヌイットのアザラシの狩猟に同行した。モータボートで遠方の小島に着し、海面に一瞬浮上するアザラシを射撃するのであるが、見事に一頭を仕留めたので集落に帰還すると予想したら、数頭を捕獲するまでは何日かかっても帰還しないという。目的の達成が重要であり、時間は関係ないのである。

そのイヌイットはヌナブト準州に生活しており、立法権限のある州に昇格するのが民族の目標である。準州の大臣に何年までに達成するのかと質問すると、自分の本業は猟師であり、真冬には極寒の氷上でアザラシを捕獲するまで何日でも待機する。同様に昇格が目標であって、何年までという期限は関係ないという回答であった。

アマゾンの奥地に生活する先住民族はマンジヨカというイモを栽培して澱粉にし、焚火でパンにして携帯食料にしている。かなり時間がかかるので、焚火を凝視している女性に、あと何分で完成するのかと質問したところ、美味しくなるまでという明答であった。時間が尺度ではなく、成果が判断の基準である。

偽書と判明しているが、南洋の酋長が西欧社会を見物した感想を『パパラギ』という題名で出版し世界で何百万部というベストセラーになった。そこには西欧の人々が一日を細切れにして行動し、いつも時間が不足すると嘆息しているという文章がある。行動の規範が目的の達成ではなく、時間になっているのである。

今回のウイルス騒動が収束するとジョブ形式の就業形態への転換が予想されるが、原罪とする労働からの脱出が目標とされる社会と相違して、勤勉が評価される日本では相当の意識改革が浸透しなければジョブ形式が大勢となる社会への転換は困難である。現在でも異質の時間概念で生活している先住民族の社会は日本の今後の社会規範の参考になる。